

《研究報告》

看護学生のプレパレーションの捉えと課題

～小児看護学演習における学生の学び～

齊藤 史恵¹⁾, 齋藤 美紀子¹⁾

要旨：本研究の目的は、看護学生（以下学生）がプレパレーションをどのような視点で捉えているのかを明らかにし、今後の指導法を検討することである。3年次生の小児看護学Ⅱにて、骨髄穿刺を控えた実在しない小児の事例へのプレパレーションを検討し、ロールプレイング方式のグループ発表を行った。終了後、学生が捉えた良い評価として【雰囲気】、【作成したツール】、【興味をもつ内容】、【小児への配慮】が抽出され、小児とのコミュニケーションやプレゼン能力の効果が良い評価に関連しているとした一方で、改善したい評価として【発達段階との不一致】、【内容の検討不足】が抽出され、小児の理解力や適切な情報量について検討が必要だということがわかった。今後は、小児の発達段階に応じた理解力をイメージ化できるような指導方法の工夫の必要性が示唆された。

キーワード：看護学生、小児看護学、演習、プレパレーション

I. はじめに

小児には、「何が起こるか話してもらおう権利」、「どのように、なぜとたずねる権利」、「理解できるように答えてもらう権利」、「不安な時に家族と一緒にいる権利」があり、看護師には、小児の権利を擁護する責務がある（永井2000）。近年、病院にて小児が検査や処置を受ける際、看護師がこれらの小児の権利を尊重するために心の準備を行うことの必要性が重要視され、プレパレーションの概念が小児看護の臨床実践の中で広まっている。プレパレーションは「心理的準備」とされており、医療や看護において処置を行う時に小児の年齢に応じた説明を十分に行うことにより処置をスムーズに行い、小児にとって不安が大きい検査や処置に自らが参加できることや小児の持つ力を最大限に引き出すことができる。入院を強いられた小児の適応を助けるという面においても、今後さらにプレパレーションの働きが重要となってくる。その流れに伴って看護教育機関においても、小児看護学における実習での効果を高めるための準備段階として、学内の講

義・演習でプレパレーションを導入する機会が増えており、より効果的で実践的な教育が必要となってきている。しかし現代の看護学生（以下学生）は、小児と接する機会が少なく、小児との関わりを苦手だと感じている学生も少なくない。現代の看護学生は、小児の情緒、分化の理解や発達段階に応じた判断ができないことにより、小児の権利を守ることに難しさを感じている（岩村2005）と報告しており、普段、異世代と接する機会が少ない学生が、講義で学んだだけのプレパレーションを演習に実践することは容易なことではないという現状がある。実践的なプレパレーション教育を検討していくためには、対象の理解をしっかりとした上で、小児の発達段階に応じた方法で言語的・非言語的コミュニケーションをはかりながら看護教育に生かしていくことを考慮していかななくてはならない。そこで学生が、プレパレーション演習を進めていく中で、小児について、どのようにプレパレーションを捉えるのか、そして今ある知識をどのようにプレパレーション実施へとつなげていけるのか、学生がプレパレーションを評価していくことを検討していく中で、学生

1) 弘前学院大学看護学部

連絡先：齊藤史恵 〒036-8231 弘前市稔町20-7

Tel : 0172-31-7119, E-mail : fumie-s@hirogaku-u.ac.jp

の思考過程で伸ばしていけるもの、足りないものが明らかになるのではないかと考えた。

プレパレーションについては、臨床で看護師が行うプレパレーションの小児の反応について、これまで多くのものが報告されている。看護教育機関におけるプレパレーションに関する報告は、臨床実習中のプレパレーション施行における学びや課題（磯部2008）、プレパレーションに対する講義前後や実習後の認識変化報告（吉田2009）と数はまだ少ない。臨床で働く看護師は、日々の業務に忙しい中、小児一人一人の発達段階と個性に合ったプレパレーションに用いるプレパレーションツール（以下ツール）を個人個人に作成し、方法を考えていくことは難しく、対象の患児に合ったツールの検討やそれをどのように使用するのか、何が優れて何が足りないのかを客観的に検討、評価する機会は少ない。普段、小児と接する機会が少ない学生が、実在していない事例の患児について時間を要してアセスメントを行い、演習にてプレパレーションを実施し、その方法やツールの検討に対しての学生の捉えについての研究報告はほとんどされていない。

本研究は、学生たちが講義・演習を通してプレパレーションについてどのように捉え、どういう視点で評価しているのか、学生が捉えるプレパレーションの評価を明らかにして、今後のプレパレーション演習の指導の在り方を検討することを目的としている。

II. 用語の定義

本研究では、以下のように用語を定義した。

プレパレーション：病気の小児たちに対して病気や治療上の処置などに関する情報を提供し、恐怖心・不安感を取り除いて治療に臨む心の準備を手助けすること。

プレパレーションツール：プレパレーションを行う際に使用した道具。本研究では、学生が事例患児のアセスメントをし、発表会のために各グループで作成したもの。

処置：注射や骨髄穿刺・腰椎穿刺などの痛みを伴うもの。

III. 研究方法

1. 調査対象

平成23年度のA大学看護学部3年次開講科目「小児看護学Ⅱ」を受講した学生43名。

2. 調査方法

1) プレパレーション演習

平成23年度の3年次生の授業科目「小児看護学Ⅱ」のうち、180分×3回を急性白血病の時間とし、実在していない小児の事例を検討し、前半を看護計画の立案、後半にプレパレーション演習を行った。事例を設定の上でその患児にいつ、どのように関わっていったらよいのかをグループでアセスメントを行い、適切だと思われるプレパレーションを考案・検討し、各グループがロールプレイング方式で10分間の発表を行った。

2) 事例患児

患児においては、実在しない事例を想定した。急性リンパ性白血病にて入院中の小学1年生の6歳で、兄弟は2歳の弟がいる。性格は優しく少し怖がりなところがある。好きなものは、アイドルとお笑い。親の意向で白血病という重い病気であることは教えられているが、病気への理解度は、「よくわからない。病院で頑張ればまた遊べるの?」と話す程度である。2日後に2回目の骨髄検査の予定で前回の検査は、よく説明がないまま行ったので恐怖や不安が強く「怖い。もう絶対やんないよ。」と怖がっているという設定とした。

3) プレパレーションの発表

事例の患児が説明されてから発表会までの期間は、2週間とし、その間学生は、各グループに分かれ、事例患児についての検討を深め発表会に臨んだ。プレパレーションに用いるツールを作成する際、「説明しなくてはならないことが含まれている」「患児に合ったものである」、「お金をかけず、小児に危険のない素材を使用する」、「ツールは、根拠をもって作成し、それをどのように利用していくのかのすべてがプレパレーションに含まれるものなので作って終了というものではない」ということを留意点として示した。

グループで検討を重ね、それぞれの根拠に基づいたプレパレーションに用いるツールを作成し、そのツールをどのように使用するのかを実践するために発表会を行った。

4) 各グループの評価

それぞれ発表したプレパレーションについて、グループで自分が所属していないそれぞれのグループに対しての評価を自由に記述した。

表1 各グループが作成したプレパレーションツールとそれぞれの理由

グループ	ツール	何故このツールを活用しようと思ったのか
A	紙芝居、ぬいぐるみ	ごっこ遊びが事例患児の恐怖心の軽減につながると思った
B	絵本	手軽で入り込みやすく終了後も使用できる
C	ペープサート(人形劇)	動きのあるツールの方が小児の関心を引きやすい
D	パソコン	色彩が明るい 関心を引きやすい
E	絵本、ぬいぐるみ、おもちゃの注射器	アイドルを絵本に登場させることで関心を持つ。注射器は、検査のイメージが付きやすいのではないかと考えた
F	人形	発達段階を考え適していると考えた。絵をみるだけでは感覚的に乏しいと思った
G	パンフレット風紙芝居、ぬいぐるみ	いつでも見返すことができる。ぬいぐるみに実際触れることでイメージしやすいと思った
H	絵本、人形	実際に触れることで患児が主体的に実施できる。絵本は終了後も母と繰り返し見ることが出来る

3. 分析方法

各グループが行ったプレパレーションの発表のあと、学生が他のグループの発表をどのような視点で評価しているのかを自由に記述してもらった。記述された内容を繰り返し読み込み質的データとした。記述された文章および単文を抽出し一つの単位としてコード化した。データは記述内容の意味が損なわれないように、全文を単文化した。この際、1文中で記述内容の意味が異なるものがある場合には、それを分割し、一つとみなした。それぞれの意味内容の類似性に基づいて名称をつけカテゴリー化を行った。

4. 倫理的配慮

対象学生が集合する機会に本研究の協力を依頼した。その際、研究目的と方法を説明した。そして倫理的配慮（研究への協力は任意であること、対象者のプライバシーは守られること、研究への不参加が学業や成績に不利益を生じないこと）について口頭で説明し、用紙の回収によって同意を得た。なお、本調査は、弘前学院大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。

5. 研究期間

平成23年8月～12月

IV. 結 果

1. 作成したプレパレーションツールと、その根拠

プレパレーションの発表時、各グループが作成したツールと、それぞれ何故このツールを活用しようと思ったのかを発表したものを表1に示した。

ぬいぐるみ、人形、絵本などのツールの活用が多かった。その理由として、今回設定した事例患児の発達段

階から考慮すると、それらのツールは、小児に関心が高いと思うからということと、触れて行うツールということで、小児が実際に体験でき、検査のイメージがしやすいことであった。絵本は、終了後も繰り返し見返すことができるという理由で選択されていた。

2. 学生が各グループの発表をどのように評価したのか

自由記述された記録を分析した結果、対象コード数は156であり、13のサブカテゴリー<>と6つのカテゴリー【】に分類できた。自由記述からの抜粋内容は、「」で示した。カテゴリーの中で各グループの発表を肯定的に捉えていると思われる評価を〔良い評価〕、もう少し改善した方がいいと思われる評価を〔改善したい評価〕に大別したものを表2に示した。

1) 学生が良い評価として捉えているもの

〔良い評価〕の中には、【雰囲気】、【作成したツール】、【興味をもつ内容】、【小児への配慮】の4つのカテゴリーが抽出された。

学生が小児と関わる中で大事なことだと捉えていることに【雰囲気】があった。それは、小児が怖がらないような<>話し方>や<>雰囲気作り>の2つのサブカテゴリーで構成されていた。<>話し方>では、「聞きやすい話し方だった」、「声が優しい」というものと、<>雰囲気作り>では、「優しい雰囲気作りが良かった」、「親しみやすい雰囲気を作っていた」という記述から構成されていた。

小児の発達段階に適したプレパレーションのツールであるということの評価した【作成したツール】では、<>ツールが良い>と<>活用方法が上手い>いう2つのサブカテゴリーで構成されていた。<>ツールが良い>

表2 各グループのプレパレーション発表をみた評価から抽出されたカテゴリーと評価別分類

評価の分類	カテゴリー	サブカテゴリー
良い評価	雰囲気	話し方
		雰囲気作り
	作成したツール	ツールが良い
		活用方法が上手い
興味を持つ内容	楽しい・面白い	
	小児の興味	
改善したい評価	小児への配慮	プラス面の強調
		不安への配慮
	発達段階との不一致	年齢に内容が合わない
		年齢に内容量(情報量)が合わない
内容の検討不足	内容が怖い	
	内容が違う	

では、「使用しているツールが布製で患児を怖がらせないような優しい感じだった」、「患児と同じ年代の人形が登場しているのがイメージ化しやすくよい」、「絵本が見やすい」、「絵本はいつでも持ち歩けるからよい」というように、ツールそのものを評価した記述から構成されていた。作成したツールの《活用方法が上手い》では、ツールを発表時にうまく活用していたことが評価されていた。「気持ちののっている時にシールを使用するのは、上手い方法だ」、進行方法について評価した「うまく活用されていて同じツールを使用してもわかりやすい」などという記述から構成されていた。

小児に興味を持って話を聞いてもらうには、楽しい内容であることが良いと捉えられ、小児の【興味をもつ内容】では、《楽しい・面白い》と《小児の興味》という2つのサブカテゴリーで構成されていた。《楽しい・面白い》は、「楽しくて自分が引き込まれた」、「とにかく面白い」、「患児が楽しみながら行えるものだ」というものと、《小児の興味》は、「患児の気を引きやすい内容だ」、「児が興味深くイメージしやすい内容だった」などという記述から構成されていた。

不安が強い小児に対して反応を見ながら、プレパレーションが一方向的にならないように【小児への配慮】を行う必要があると捉えられ、《プラス面強調》と《不安への配慮》と《理解度・反応の確認》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。《プラス面強調》では、「この検査を行えばこのようないいことがある

ということを強調していることがよかった」、《不安への配慮》では、「痛みがないことを何度も強調している」、《理解度・反応の確認》では、「患児の頑張りを認める言葉がけがよい」、「患児の思いを受け止めようとする姿勢がよい」、「患児の反応を確認しながら行っていることがよい」などという記述から構成されていた。

2) 学生が改善した方がよい評価として捉えているもの

他のグループの発表を評価して、この部分を改善した方がよいとした〔改善したい評価〕は、【発達段階との不一致】と【内容の検討不足】の2つのカテゴリーで構成されていた。

改善した方がよいと捉えた項目には、事例の患児の発達段階に合っているのかという視点で評価されたものが多く【発達段階との不一致】では、《年齢に内容が合わない》、《年齢に内容量(情報量)が合わない》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。

《年齢に内容が合わない》では、「キャラクターの登場が多く、内容が幼い」、「もう少し難しくしてもよい」といった幼稚だというものや、反対に「漢字や言葉遣いが難しい」、「用語がわかりづらい」、「内容が複雑すぎる」といった難しすぎる内容に関する記述から構成されていた。また6歳の事例患児の理解できる情報量についても捉えており、《年齢に内容量(情報量)が合わない》は、「内容が多すぎて小児が理解できない」、「情報量が多い」というものや反対に「伝えなく

てはならない内容が伝えていない」という記述から構成されていた。

【内容の検討不足】は、《内容が怖い》、《内容が違う》という2つのサブカテゴリーで構成されていた。《内容が怖い》では「注射を用いるのは痛みをイメージさせる」や「針に触れさせるのは、いくらおもちゃでも恐怖心を増大させるのではないかと思う」、「説明が詳しくすぎてリアルすぎて怖い」というものがあった。《内容が違う》では、「やろうとしている検査の内容を説明する側が理解していないと思った」という記述から構成されていた。

V. 考 察

1. プレパレーションは説明ではない

学生たちは、6歳の事例の患児について、骨髄穿刺の説明をある程度理解できる年齢であると判断し、具体的に検査内容について様々なツールを用いながら実施していた。小児の発達段階に合わせて、ツールに触れたり、体験したりしながら実施していくことは、小児が検査や処置のイメージがしやすく効果的であると思われる。学童期の小児は、現実的ではない状況や事柄に関して、十分論理的に施行することはできないが、現実に見たり、体験したりする事柄については、具体的に理解し、わかる範囲で論理的に考えられる(村端2011)というように、小児にはパンフレットやビデオ、絵本などや実際の医療器具を用いて、解剖・生理、処置の手順やその時に感じる事、処置後どのような状態になるのかなど、小児がこれから起こり得ることの見通しが立てられるように簡単な言葉で説明することが重要だということを学生は理解できていると思われる。今回学生が、プレパレーションに選択したツールに関しては、ぬいぐるみ、人形、絵本などのツールの活用が多く、それらのものを6歳の小児の関心が高いツールであると捉えられていた。医療従事者が小児への説明でよいと考えられている方法は、6～8歳で、「絵本・パンフレット」で最も多く、次いで「ビデオ」の順である(蝦名2009)が実際に行なっている方法は、6～8歳で「口頭のみ」が最も多く、次いで「絵本・パンフレット」である(蝦名2009)としている。学生が絵本や紙芝居などのツールを選択してプレパレーションを行ったことは、医療従事者が小児への説明に適していると認識しているように発達年齢にほぼ合致

していることがわかった。

プレパレーション実施時に各グループに何故このツールを活用しようと思ったのかについての記述の中では、どのようなものが小児の興味を引くのか、どうすれば主体的に小児が頑張れるのかという検討がされていることや、説明して教えるというスタンスであることが中心となっていることがわかった。しかし小児の処置や検査の不安や恐怖について検討を行っていたグループは、一つだけで今回の発表は、患児役はグループから選出された顔見知りの学生だったこともあり、実際に小児の不安や恐怖がどれだけ強いのかという検討まではされていなかったようであった。説明の内容を理解できても、不安や恐怖が非常に強い状態で間違ったプレパレーションを行うと、更にそれを増強させてしまう恐れもあるため、対象を理解するために不安や恐怖を十分理解して実施することが大切である。小児は、言葉で自分の感情を上手く表出することができないため、泣いてもいいことややりたくないという気持ち、どうしようもなく怖いという小児の心にどう寄り添ってあげばいいのかということを中心に検討していく機会をつくる必要があると考えられる。

2. 学生の良い評価から考えられること

良い評価の側面から考察される、学生が理解しているプレパレーションについての捉えを図1に示した。

学生が各グループの発表をみて捉えた良い評価には、雰囲気作りや小児への声かけなど、小児とのコミュニケーションに着目し、プレゼンテーション能力を重要視したと思われるものが多かった。小児のアセスメントを行いツール使用のための日時、場所の配慮、セッティングも考え、ツールの活用方法や雰囲気作りなどを考えられていたことは、学生が、事例の患児は説明をある程度理解できる年齢だと判断し、積極的に説明してみようと試みたと考えることができる。良い評価では、プレパレーションで伝える内容だけでなく、プレパレーションを実施する場所の雰囲気、小児とのコミュニケーション技術、さらにプレゼンテーション能力も、小児の不安を和らげるために大事なことだと捉えられていることが示唆された。強い不安をもつ小児に対して、プレパレーションを行う場合には、ただ説明を行うだけではなく、まず小児と仲良くなってから、親しみやすい雰囲気、発達段階に合ったツールを用いて、小児の反応を確認しながら、頑張りを引き出していくとよいと学生が良い評価として捉

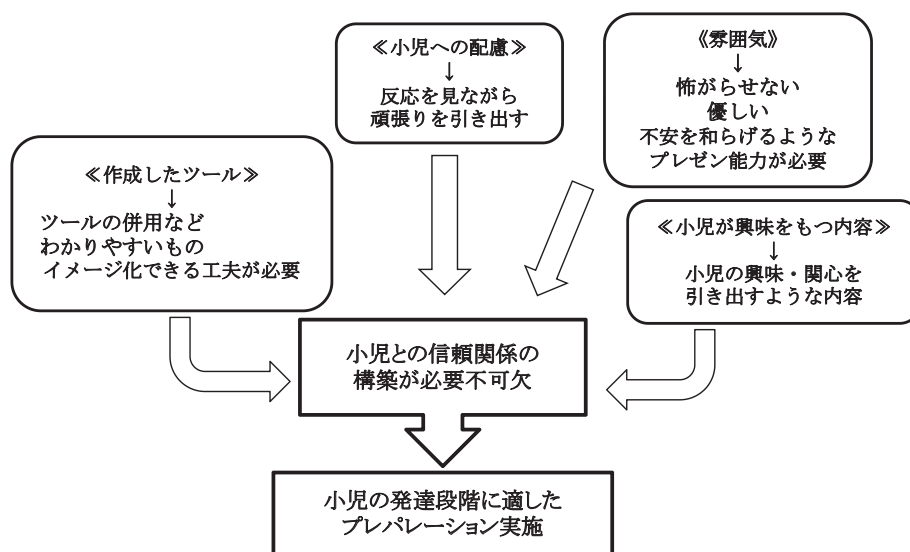


図1 良い評価の側面から考察される、看護学生が理解している
プレパレーションについての捉え

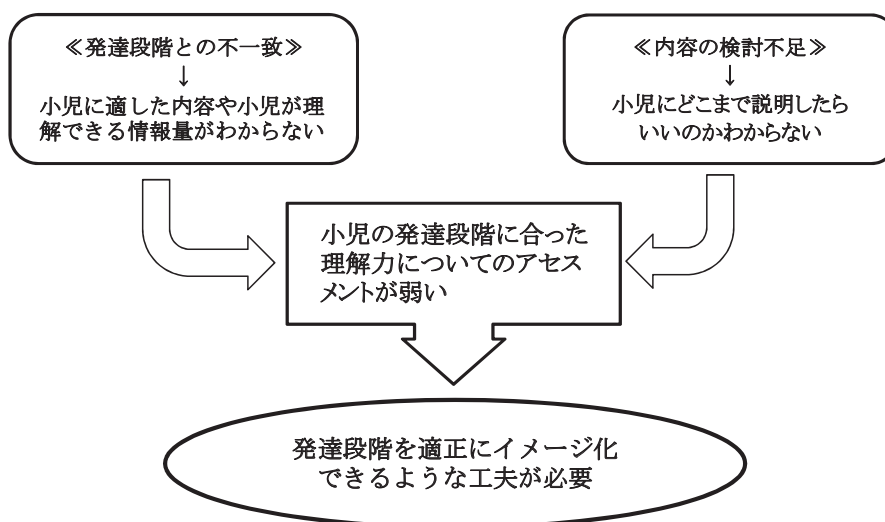


図2 改善したい評価の側面から考察される今後の課題

えていた。このことは、プレパレーションの5段階のステップの中の第2段階目にあたり小児と仲良くなることはプレパレーションの計画を遂行していく上で欠かせない(及川2007)ことだということからもわかるように、小児の気持ちの表出、理解を深めることにつながり、プレパレーション本来の意義をよく理解できていることを示しており、今後さらに強化していきたいと考える。さらに学生が良い評価として捉えたこれらのことは、小児とのコミュニケーションについての発達段階の知識が理解できていないと適切に行うこと

ができず、小児と信頼関係を深めて、発達段階に合ったプレパレーションを行うことが必要不可欠なことであると学生が理解していることがわかる。

3. 学生の改善したい評価から今後の課題へ

今回学生がプレパレーションの発表をみて自由に記載したものの分析結果から改善したい評価とした事柄から考察される今後の課題を図2に示した。

改善したい評価の【発達段階との不一致】は、発達段階の評価の中でも実施内容そのものや、小児の理解力に関するものが多く、キャラクターの登場が多く、

内容が幼い]、[漢字や言葉遣いが難しい]、[内容が複雑すぎる]、[内容が多すぎて小児が理解できない]のような記述が多くみられていた。このことは、対象となる小児がどのくらいの理解力があるのかというイメージが学生にとって様々であり、難しく捉えられていることがわかる。よってプレパレーション実施において、事例患児である6歳の小児の理解力をどのように理解するのかというグループによるアセスメントがそれぞれ違ってしまったことが考察される。

小児が説明の内容をある程度は理解できると判断しているグループは多かったが、「説明が詳しすぎてリアルすぎて怖い」という記述から、しっかりと説明をすることがプレパレーションだと思い、詳細になりすぎたり、与える情報の量が多すぎてしまったグループもあったようである。学生たちは、プレパレーションは、小児の人権を守るために小児への検査や処置前の説明が大切である(片田1997)と学んでいるが、検査や処置に対して不安や恐怖は、詳しく説明して教えることで、それが解決されるものではない。特に小児にとって、侵襲の大きい非日常的な体験である検査や処置についてのプレパレーション実施時、小児の不安や恐怖を更に強くしてしまう恐れもあり、十分に検討を重ねた上で、慎重に行うべきことであることを指導していく必要があることがわかった。

今回の研究で学生が、小児へのプレパレーションについて、その大まかな方法や雰囲気についての理解はできていたが、小児の発達段階に適した内容や適切な情報量などの小児の理解力についてのアセスメントが弱く、更なる検討が必要だということがわかり、学生に臨床場面での判断力を高める演習方法の検討、小児の発達段階を適正にイメージ化できるような指導方法の工夫が必要であるということが示唆された。

VI. 結 論

1. 看護学生が他のグループのプレパレーションの発表をみて良いと評価した記述では、【雰囲気】、【作成したツール】、【興味をもつ内容】、【小児への配慮】があり、小児とのコミュニケーションやプレゼンテーション能力を重要視したものが多かった。

2. 改善した方がいいと評価した記述では、【発達段階との不一致】、【内容の検討不足】があり、実施内容や小児の理解力に関するものが多かった。
3. 今後のプレパレーション演習の指導のあり方については、臨床場面での判断力を高める演習方法の検討、小児の発達段階や小児の理解力について、適正にイメージ化できるような指導方法の工夫が必要であるということが示唆された。

VII. 謝 辞

本研究にご協力くださった学生の皆さんに感謝申し上げます。

VIII. 引用文献

- 1) 蝦名美智子, 松森直美 (2009) 手術を受ける小児のプレパレーションに関する医療者への意識調査. 文部科学省科学研究費補助金「医療・処置・手術を受ける小児へのプレパレーション・モデルの開発と教材作成」平成17・18・19年度研究成果報告書 48-62
- 2) 蝦名美智子, 松森直美 (2009) 手術を受けた小児の親へのプレパレーションに関する医療者への意識調査. 文部科学省科学研究費補助金「医療・処置・手術を受ける小児へのプレパレーション・モデルの開発と教材作成」平成17・18・19年度研究成果報告書 63-68
- 3) 磯部尚美, 柴 邦代 (2008) 小児看護学実習におけるプリパレーションからの学生の学び, 愛知きわみ看護短期大学紀要, 4, 117-127
- 4) 岩村徳子, 松井弘美 (2005) 臨床実習における子どもの権利学習過程 日本看護学会論文集小児看護 137-139
- 5) 片田範子 (1997) 子どものQOLと子ども権利: 手術を受ける子ども看護を中心に, 小児看護, 20 (5), 651-654
- 6) 村端真由美 (2011) 短期入院で手術を受ける小児の主体性を引き出す看護. 小児看護, 6, 715-721
- 7) 永井憲一, 寺脇隆夫, 喜多明人, 荒巻重人 (2000) 子どもの権利条約 日本評論社
- 8) 及川郁子, 田代弘子編集 (2007) 病気の子どものプレパレーション, 中央法規, 8, 13-14
- 9) 吉田雪絵, 佐藤洋子, コリー紀代他 (2009) 小児看護学実習で看護学生が行ったプレパレーション(その1) 実施に関する協力状況と困難さに関する検討, 第19回日本小児看護学会, 138

NURSING STUDENTS' VIEWS ON PATIENT PREPARATION AND THEIR CHALLENGES - LEARNING EXPERIENCES DURING PEDIATRIC NURSING PRACTICE -

Fumie SAITO¹⁾, Mikiko SAITO¹⁾

Abstract: This study aimed to clarify nursing students' views on patient preparation and appropriate teaching methods. Third-year students made group presentations after discussing methods to prepare simulated pediatric patients for bone marrow puncture during Pediatric Nursing Course II, adopting the role-playing technique, and evaluated their outcomes. The students positively evaluated: [atmospheres], [created tools], [contents of interest], and [considerations for pediatric patients]; their positive evaluation was based on the ability to appropriately communicate with pediatric patients and presentation skills. On the other hand, they considered it necessary to address: [inconsistency with developmental stages] and [insufficiently developed contents], highlighting the necessity of examining pediatric patients' level of understanding and appropriate information provision in more detail. As future perspectives, it may be necessary to devise teaching methods to guide students to accurately determine pediatric patients' level of understanding in consideration of their developmental stages.

Key words : nursing students, pediatric nursing, practice, patient preparation

1) Faculty of Nursing, Hirosaki Gakuin University
Tel : 0172-31-7119, E-mail : fumie-s@hirogaku-u.ac.jp